

第三十六回 国宝松本城新能

平成二十九年八月八日「火」午後五時三十分開会

国宝松本城本丸庭園特設舞台

能 観世流
狂言 大蔵流

国宝松本城新能は、おかげさまで二十六回を数え、市を代表する夏の風物詩となつていきます。

本年は観世流・坂井音重師をはじめとする能楽師の皆様を迎え、国宝松本城を仰ぐ本丸庭園にて、幽玄の世界を繰り広げます。

番組は、坂井音晴師による「花月」と、坂井音重・坂本音雅師による「安達原」の能

二番に、山本東次郎師による狂言「二人大名」が添えられます。

北アルプスの山並みが夕日に染まり、国宝松本城が浮かびだされる頃、かがり火が灯されます。その炎に照らされた野外舞台で、鼓や笛が響き能楽師の舞が始まります。

日本の伝統芸能に触れる真夏の夜をどうぞ、ごゆっくりお楽しみください。

番組解説

◆能——「花月」

我が子が行方知らずになり、出家をして僧となった父（ワキ）は九州から諸国修行に出て京都・清水寺に参詣に来ます。清水寺の門前の者（アイ）が、ここで舞や歌などの遊芸をする少年がいることを教え、呼び出します。すると花月（シテ）という少年が現れ、自分の名前の謂われを語り、門前の者と恋の小歌を樂しみ、桜を踏み散らす鶯を弓で射ようとする様などを見せます。少年は僧に清水寺の縁起にまつわる曲舞を舞つて見せますが、それを見た僧がこの少年・花月こそ自分の子であると気付き、喜びの再会を果たします。

花月は門前の者の勧めで鞆鼓（かっこ）を打ち、七歳の時に天狗にさらわれて諸国の山々を巡り歩いた様を舞い謡い、やがて親子一緒に仏道修行の旅に赴くのでした。

花月 Kagetsu



◆狂言——「二人大名」

二人の大名（アド大名・甲、大名・乙）が京へ向かうのにお供を伴って来なかったで道中で臨時のお供を探します。そこにたまたま通りかかった者（シテ・通りの者）を言いくるめてお供をさせます。大名たちは通りの者に太刀を持って、家来の太郎冠者のように返事をしろなどというように扱います。腹に据えかねた通りの者は隙を見て太刀を抜き、大名たちの脇差し（小刀）までも取り上げます。今までのお返しとはかりに大名たちに犬の真似をさせ、ついには身ぐるみをはがして…。

二人大名 Futaridaimyo



◆能——「安達原」白頭急進之出

紀州・和歌山の僧である祐慶（ワキ）は、同行の山伏（ワキツレ）と共に諸国を廻る旅の途中、陸奥・安達原で日が暮れてしまいます。そこには「軒の寂びれたあばら家があり、その家の主の女性（前シテ）に一夜だけの宿を乞います。主の女性はあまりにみすばらしい事から最初は断りますが不憫に思い、泊めてあげます。女性は祐慶の所望で杵杵輪（ウツクワ）という糸練りの車で糸を繰る様を見せますが、その糸車に自分の人生を重ね合せて長い命のつれなさを嘆き、涙を流すのでした。夜も寒さが厳しくなり、暖を取る為には山へ薪を取りに出ようとしています。女性はふと立ち帰って自分の留守の間は決して寢室は見ないで下さいと祐慶二行に重ねてお願いをして出掛けて行きます。

一行は休もうとしますが、同行していた能力（アイ）がその隙を見て寢室の内を覗いてしまします。そこには人間の屍が山ほど積まれました。女性の正体がかの有名な安達原・黒塚の鬼女であったと気付いた祐慶行はすぐさま逃げ出します。すると、約束を破られ、裏切られたと知った女性が鬼女（後シテ）の姿となって追いかけて、襲いかかってきます。祐慶二行は数珠を手に取り、呪文を唱えると鬼女は倒れ伏し、やがて夜嵐の中に消え去っていくのでした。

安達原 Adachihara

